
【急募】あたしの名前！

伊達巻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【急募】あたしの名前！

【著者名】

伊達巻

N91805

【あらすじ】

Twitterだけが社会との接点な、そんな引きこもりの一人生活。

どうしようもない、どうしようもないんだ、諦めきった言葉しか青年の口から出てこない。

名無しの女の子に名前をあげたとき、物語はTwitterから外へと動き出す！

ライトノベル作法研究所にも同名義で投稿しました。

UNOOPEN 【急募】あたしの名前！

g_m_kun @UNOOPEN うーー。
UNOOPEN @g_m_kun …ピキッ。猫のうんこ踏んで

死ね！

それが、僕と彼女のファーストコンタクトだった。

第一印象は最悪だ。

僕としてはTwitterの公共性を考慮して伏せ字にしたつて
いつのに、向こうはダイレクトにうんこ発言ですよ。そりやないよ、
と半年ほど床屋に行つてない無造作ヘアをワイルドに搔きながら、
僕は思わずディスプレイに向かって「やれやれ」と呟いてしまった。
いま、ちょっとだけ自分にさば読んだ。

本当は半年どころか一年以上、食糧調達以外ろくすっぽ家から出
てない完成された出不精の僕。鏡なんか見たら「やれやれ」じゃ済
まない「ミコニケーション障害」十歳児が映つてしまい、[冗談抜き
で自分自身に吐き気を催してしまつ。
死のう。

そう思つたことも一度や一度ではない。いちいち交通量調査よ
しく数えてなんかないからわからないけど。

困つたことに、僕はどうしようもない人間だという自覚はある。

Twitterのエロだつて、「ミノ唇を自称してしまつ卑屈な男
なんだ。

対する“UNOOPEN”はいい加減使い古された感があるパロゲ
イが元だろう。アガサ・クリスティの小説はミステリというよりヒ
ステリな作風が多いと思うけど、そんなことを言つたら黒ずくめの
男たちに社会的に抹殺されてしまつだろ？から、もちろん言わない。
とにかく、今は目前の“UNOOPEN”について考えてみよう。

アイコンは「デフォルトの小鳥のまま。ちなみに僕のアイコンは、くしゃくしゃに丸めたティッシュだつたりする。「人間は考えるチッシュである」を定期ポストしてゐるくらい、二ヒルなティッシュだ。

僕はもぢりん毎日ティッシュを浪費する不健全な男子だけど、『UNOON』はどうだろ？。

あたし、という一人称を人見知りがなくなつた三歳児のようにな無垢な心で信じれば、『UNOON』は女性である可能性が高い。私、ならまだしも、あたし、というところがミソだ。男性なら書き言葉でも「あたし」を使うことは少ないだろ？。

ところがどつこい、社会の荒波に飲まれたことはないくせにネットの荒波には揉まれ慣れてゐる二十歳児の僕は、変な期待を抱かないのであつた。

たとえ可愛らしさにな、胸きゅんだな、という発言があつたとしても、今日もおっさん頑張つてゐる、とクールに流すスキルが身に付いてるのだ。

つい最近、ちょくちょくTwitter上で絡むようになつてきてどういう人が気になるなあ、と思っていたアカウントがbotだつたときの衝撃。僕に一生消えない爪痕を深々と残した『bot美人局事件（勝手に命名）』も考慮しなければならない。

そんな僕がTwitterを始めて、はや三ヶ月。きっかけは、こんなネット記事を見つけたからだ。

『Twitterをやつてるのはリーダー型の男性が多い』

マジで！？

なら、僕もTwitterやつたらリーダー型の男性になれるの！？

鶏がさきか、卵がさきか。泣くから悲しいのか、悲しいから泣くのか。Twitterをやつてる男性がリーダー型なのか、Twitter

terをやつてればリーダー型の男性になれるのか。

三日間寝ずにネットでレアアイテムを求め続けて朦朧な状態で作ったことを踏まえても「アホかと！ バカかと！」と自分でも思つ非論理思考でTwitterを始めたのだ。

そして、はた、と気づく。

「こまぢうしてる？ だ、と……。んなもん、ぢうせ僕は何もしてねえよおーーー！」

記念すべき最初のつぶやきで「自宅なう」と平日の真っ昼間ににしてしまったのも比較的新しい黒歴史の一つとして腐った生ゴミのような瘴気を発しながら自己主張してゐる。そして、はた、と気づく。

「こまぢう……僕とは違う……は、働いてるー。学校行つてるー。なんだよおおーー！」

家から何食わぬ顔して出られるだけでリア充認定ができる僕としては、衝撃だつた。

匿名掲示板だつてもちろんそんなんだらうけど、中途半端にオーブンに個人が個人として特定されるTwitter文化で「カラオケなう。ちょー楽しい」「いま彼氏と一人で観覧車に乗つてまーす」「なんか見てみるよ写真付きで、こちとら「自宅なう」がデフォだよ、たまたもんぢやない。

一度「自殺したいなう」なんてつぶやいたら、「とりあえず、落ち着こう」と存外に真面目な雰囲気で諭されたときはかなりこたえた。それが如何にも自己啓発セミナのアカウントで不自然につぶやきの数が多くて半自動で「自殺」というフレーズに反応してるのでスパムだとわかったときは余計にさ。

だけど、暇さだけが取り柄の僕には、Twitterはうつてつ

けの暇潰しになつた。

フォローされたら光の速さでフォローし返す、という一ート固有スキルのおかげか、薄っぺらながらも幅広い繋がりがある。別にフォロワーが増えたところで、気負うこともない。

どうせ、僕はどうしようもない人間だから。

こなすべきノルマもないし、ネトゲのように相手と時間を合わせる必要もないし、ぼちぼちと自分の何気ない一言に反応してもらえた、そこそこ嬉しかつたりする。それだけで、充分だつた。

リーダー型の男性？ はあ、まあ、そういう人もいるでしょうね、という感じで当初の目的は三日も経たずにどうでもよくなつてしまつたけど。

もちろんオフ会などというアクティブな話をしてるのを横目で見てるだけなのは、なんとなく自分が惨めになつたりするけど、もともと自信なんてものは公衆便所でお尻に正の字を書かれる勢いで喪失してきた。

やりたいことがある、どうそぶいて大学を中退し一年あまり。
夢といえるものが、ないこともない。

一応、小説家やシナリオライターになりたいと思いぱつぱつ書いてるけど、書いてる時間の倍以上はネトゲをやつたり無意味にネットコースのリンクを辿るだけの日々。

何かを書きたいという欲求も、嘘ではない。

僕は、引きこもりなオタクの例に漏れず、ゲームや小説が好きだ。フィクションの世界でなら僕は常に主人公になれる。無条件に女の子にモテることもできるし、悲しい宿命を背負った勇者として世界を救うこともできる。

文字通り陽の光の当たらない生活をしてる僕なんかには、たまに眩しそぎることもあるけど、やっぱり面白い話に触れると感動するし、いつしか自分でも作ってみたいと思つよつになった。

不特定多数の人を感動させるものを、自分で作れてお金が貰えたら、少しあ生き甲斐が出るかもしれないと夢見たりする。まったくもって将来設計のなつてない未来予想図だけど、それ以外に道はないと思うほど僕は他に取り柄がなかつた。

もちろん文才がある方かと聞かれたら、もつてまわつた独特な言い回しがたまに褒めて貰える程度で、自分より上手い人間なんて五万といふ。

本当、どうしようもない。

小説家になりたい、シナリオライターになりたい。

たまに、本当に自分がプロの物書きになりたいのか、わからなくなる、不安になる。

やりたいことではなく、やりたくないことから逃げるための口実なんだ、きっと。

自分でも気づいてるから、余計に悪い。

親からの仕送りは続いているけど、あいにく固定電話という鬼畜なアイテムは持っていないから半音信不通状態。あれは、危険だ。鳴つただけで、僕の寿命を縮ませてくる。死神の足音の方が遙かにマシだと思う。

携帯の着信は、もちろんマナー設定。常に留守状態を決め込んでる、携帯なのにどうにかこうにか、たまのメールのやり取りで故郷の両親に生存報告してるけど、これ以上不審に思われたらアパートまでやって来るかもしれない。

そしたら、ジ・エンドだ。

恰好つけて公務員試験の勉強中、と愚にも付かない嘘をついてたことも、バレてしまつ。

それでも、僕のことを否定しないであろうどこまでも優しい両親……心底死にたくなる。

既に“レゾナンス”のことは頭になかった。自分のことで手一杯で、苦しくて、辛くて。周りなんて見る余裕がなくなる瞬間が、僕には唐突に訪れる。

弱いから、みじめだから、どうしようもない。

「本当……どうしようもないよな、僕」

思わず、つぶやく。

散らかり放題のかび臭い部屋に、僕のつぶやきは吸い込まれていった。

虚しい。

誰に向けるわけでもないつぶやきとこのは、結局は自分に返ってくる。

どうしようもない。

本当だ。

どうしようもない、僕は、本当だ。

繰り返す。

言葉にすることで慰めを求めてるのがわかつて、吐き気がする。

今が朝なのか夜なのかすらあやふやだ。

生きてるか死んでるかだつてあやふやだ。
なら、いっそ。

「もつ……死のうかな。なーんて、ね……」

僕より優秀でみんなに惜しまれる人はあつさり死んで、僕みたい
な屑は長生きしてしまうのかもしれない。虫の意外な生命力を彷彿
とさせる。そんなこと言つたら、懸命に生きてる虫に失礼かもしれ
ないけど。

ごみくら 本当……どうしようもないよな、僕。誰かさ、こ
こから僕を救つてくれない?

ごみくら 取り柄なんてないし実績なんて皆無だし要領悪い
しないない尽くしだけど。

ごみくら 【急募】僕みたいなゴミ屑を、かび臭いゴミ箱か
ら救い出してくれる人。

みじめだった。

けど、この鬱屈したもやもやを自分の中だけに留めきれないのも
事実だった。

早速さつきのツイートに対するリアクションが返つてくる。反応
がもらえるようにつぶやいたし、僕は幸いフォロワーが多かったの
で、これは期待通りだ。

プライドを切り売りして、同情を買った。

まったく、自分の卑しさに反吐が出る。

自分宛のつぶやきがディスプレイに流れるのを、暗くなつてきた
部屋でぼんやり眺める。

ネットのように顔が見えないと、人は優しくなるか厳しくなるか、
どちらか極端な立場をとるらしい。匿名性の高い掲示板だと攻撃的
になりやすく、匿名性が下がるに従い擁護的な意見が反比例して増
える。Twitterはオープンな場でおかつ匿名性が保ちにく
いので、どうしようもない僕にも優しい言葉を投げてくれる。

生きる、いや、生きてますけど、頑張れ、それ、鬱な人に言つち
やいけないって知らないんですか、とりあえず落ち着こう、また、
怪しげなセミナのお誘いですか。エトセトラ。

液晶に映る生温い人の優しさに触れながら、僕はどうにか、ぎり
ぎりの崖っぷちに生きていた。底辺にもほどがあるし、未来なんて
真つ暗だけど、たぶんそれでも……。

ふと、"UNOGEN" のシートが田に止まつた。

UNOGEN @39-kun ……も、わかつたから、早く
！【急募】あたしの名前！

こいつはどんどんだけ、自分の名前を決めてほしいんだよ。
俺宛ての【急募】ってなんだよ、急ぐようなことかよ。
そういうたツツコミを入れてやるうかと思った、けど、なぜだろ
う。僕はありふれた励ましの言葉より、「も、わかつたから」とい
う一言に……救われた。

逃げ場所を、与えてもらつた気がした。

気のせいかもしれない、気のせいだろう。

わかつてもらえるものか、わかつてもらつてたまるか、僕の苦し
みはきっと僕だけのもので共有なんてできないもので、閉じて湿
つぽくて氷点下でもぐつぐつ沸騰してゐる氣色悪い灰色のスープで…

…。

それでも、"UNOGEN" は「もう、わかつたから」と言つて
くれるのだろうか？

もしかしたら、誰でも良かつたのかもしれない。

誰かに、励まされるのでも叱られるのでもなく「も、わかつたか
ら」という言葉をずっと待つていたんだ。ただ、認めてもらいたか
つた。受け入れてもらいたかった。

僕が欲しかったのは、大物俳優に向けられる煌びやかなスポット
ライトではなく、トップアスリートに用意される誇り高い表彰台で

もなく、ただの……逃げ場所だった。それが「もう、わかつたから」に込められてるよつに感じた。

まだ名前も知らない“UNOON”というアカウント。

そう、名前。

どうして僕のかわからぬいけど“UNOEN”は名前を欲しがってる。偶然だろうが、僕は“UNOEN”にセサヤかな「救い」をもらつた。なら、せめてお前くらいあげてやらないとフェアじゃない。

あたしという一人称から、ここは素直に“UNOON”を女性と仮定しよう。もしこの前提に文句を言われても、僕には非がないはずだ。な、なるべく可愛らしい名前がいいだろう。

……よし、思いついた。

前くれてやるづ。
@UNOEN_kun そんなこほしいんなら、僕が名
UNOEN @UNOEN え？ おお！？ リアクション
があつた！ ありがと！ でどんなん？

未来つて書いて、
愛未。アイミ

その日のアイミのツイートは、それが最後だった。

今さら気になつてアイミのプロフィールページに飛び、僕は少し

驚いてしまった。

フォロー数1フォロワー数1つぶやきも僕とのやり取りだけ。

つまり、本当に始めて間もなかつたんだ。

自己紹介も「ちょっと痛い発言が多いかもしだれない、ただの妄想好きなです」とあるだけで、詳しくは書いてない。現在地は、鳥かごの中。もちろん、この手の冗談は珍しくないし、そういう僕だつて「ミニ箱の中と書いてるのでどうこいだ。

そして、プロフィールの名前は……。

既に、アイミに変わっていた。

それから一週間、アイミは何もつぶやかなかつた。

gō-kuz 本日も晴天なう。けれど僕の心は曇天なう。いつも恋人は心太なう。

gō-kuz 「うつ」を変換して最初に何が出るかによつて、その人が鬱。

gō-kuz 【公園で黄昏れる親父ギャグ】カッター買つたらもつ……死のうかな。

相変わらず、僕はどうしようもないことをつぶやいてた。

こんな僕でもフォローしてくれる酔狂な方が多いので、何気なく書き込んだつぶやきがふあぼられたりリツイートされたりするのは、最初こそ申し訳ない気持ちになつたけれど、次第に快感になつてきた。

「コミュニケーションが嫌いなのに、誰かとどこかで繋がつてないと不安で仕方ない。

どうしようもなくあやふやな僕は、どうしようもなく矛盾していた。

へばり付くように『ディスプレイの前から微動だにしない熟練された出不精の僕は、PCに根を張り巡らして『繋がりたい欲求』をネット経由で吸収していた。

ちなみに、葉緑体がないのか光合成はしない。

太陽の奴は、僕のみじめさをあざ笑うかのようにいつも笑つてやがる。月だってニヤニヤ笑つてるけど、太陽は僕の嫌いな体育会系のようガハハと笑うから嫌いだ。みんなも笑つてる。お日様も笑つてる。ルールルルルルー！

回転椅子でくるくるとダンスをする頭がお花畠な僕は、一週間ぶりのアカウントを見つけて自転を止めた。

UNOOPEN U.N. オーハンはあたしなのだッ！

UNOPEN 嘘なのだッ！ あたしの名前は、ア、アイ＝……

うは、やっぱハズッ！

UNOPEN てが、これ見てたら反応しろッ！ 名付け親で童貞一ートのキモオタ野郎ッ！

gm_kun @UNOPEN 誰がキモオタだ！ セツかく名付けたのに、とんだ親不孝者め！

UNOPEN @gm_kun 童貞一ートを否定しないことUNOPENを見ると、どっちが親不孝者だッ！

gm_kun @UNOPEN onen

ま、負けた……。

それはそれは疾き」と風の如く、あっせつとカウンター一発で首まで持つてかれた。

いやけど、アイミの返しは辛いつて、僕に「うかはまつぐんだ」ですよ。親不孝者だなんてわかつてるし、童貞一ート否定できなーいし、どっちかといつとキモオタも否定できるかどつかわからないし。

このままだと精神的に完膚無きまでに凌辱されてしまつので、流れを変えなければ。

gm_kun @UNOPEN んなことより、名付けたのも束の間、全然つぶやかなかつたじゃん。

UNOPEN @gm_kun もしかしてだけ、アイミのこど、心配してくれたのかにや？

gm_kun @UNOPEN バカじやねえの、そんなんじやねえよ、バカじやねえの。

UNOPEN @gm_kun ツンデレ、ツンデリー？ ツンデリスト？

gm_kun @UNOPEN ワタシ・ハイゴ・ワカリマセン・

「ハ・ハ・ハスカ？」

UNOOPEN @g_m_kun 意味わかんないけど、人生に迷子ってことは伝わった！

心配してくれたのか、と問われて始めて、ああ、僕はアイミのことを心配してたんだなっていうことに気づかされて、どうにか誤魔化そうとしたのに、また些細なダメージを受けるなんて。

そうか、どうせ僕は人生に迷子なちゃらんぽらんですよ。

なら、アイミはどうなんだろう。

一週間どうしてたのかについてはお茶を濁された感があるので、遠回しに聞くか。

g_m_kun @UNOOPEN そつかりや、随分と暇ひじや
ないか。学校とかないの？

UNOOPEN @g_m_kun うーん、朝と夜以外は、ぐずつ
ちと同じくらい暇かな。

g_m_kun @UNOOPEN 朝と夜以外？ そんなことよつ
おい！ ぐずつち、て誰だよ！

UNOOPEN @g_m_kun え？ なに？ ハハハって言わ
れたいんだ（冷めた目）

g_m_kun @UNOOPEN いや、まあ、ぐずつちでいいで
す……。

Twitterは誰にメッセージを飛ばすか@を付けて表しているので、さん付けで呼んだり呼ばれたりする機会が少なかつたから気にしてなかつたけど、僕はIDがg_m_kunで名前もハミ肩という卑屈全開のネーミングだつた。

ハミ肩のような人間といえども、ハミ肩と呼ばれるよりかまだ嬌のある「ぐずつち」という呼び名の方がいいだろう。
あだ名なんて、あまりに思い出がないけど。

そんなことはどうしようもなく些末な問題だ。

ネット上で、『いい顔だなんだと言われたところで、僕はまだダメージを受けない。インターネットといつワクンクッシュヨンがあれば、僕は人と安心して繋がることができる。リアルだところはいかない。生きるまでにむき出しの醜い世界が、僕を襲うから。

他人の空々しい視線、形だけは文句なしの偽善、鋭い悪意、言葉、ナイフのようだ。

もう、あんなのは、嫌だ。

UNOON @g_m_kun ねえ、ぐずつち……。ネットって、優しいと思わない？

思わず、息をのんだ。

ちょうど考へることを見透かされたような気がしたけど、偶然だ。アイミも、現実で何かしらの問題を抱えているのかもしれない。僕と一緒に世界に恐れを抱き、安全な箱庭しか居場所がないのかもしれない。だからこそ、僕に「もう、わかったから」と逃げ場所を与えてくれたのか。なら、僕もアイミにひとつ逃げ場所になれるのだろうか。

g_m_kun @UNOON きっとさ、現実が厳しすぎるだけなんだよ、それは。

UNOON @g_m_kun だね……。あーあ、誰か私を救ってくれる王子さまいないかなー。

g_m_kun @UNOON これみよがしだな！ やっぱり、アイミも引きこもりか！

UNOON @g_m_kun ふふふー、この人、自分が引きこもりつて暗に認めてますよ。

g_m_kun @UNOON は？ 全然ちげえーし。平日休みだけだし。やつ手の営業だし。

HN00EN @ ぬま_kun 強がんなくていいじゃんッ！

あたしも似たようなものなのだッ！

まつたく、引かれもつって威張るようなことがよ、と思ひながらも、やはり僕は少しだけ肩の荷が下りたような気がした。

傷の舐め合いでという自覚はある。

Twitterというテーブル上に精神的内臓を無造作に広げだして、誰か僕と同じような疾患をもつてませんか、もしくは治してくれる素敵なお医者さんはいませんか、と下心丸見えでつぶやいてるんだ。自虐的なつぶやきにTwitterを使っているのは、そんな奴ばっかだ。もちろん僕も例外じゃない。本当に、どうしようもない。

アイミとの繋がりは、生温い馴れ合ひだった。

手探りだけど、自分の暗部を仄めかしながら、お互いの内臓の感触にホツとしていた。

逃げ場所が居場所になつてゐるんだろう、どうしようもないこと。以来、僕とアイミはTwitterを通してちくちくやり取りをするようになつた。

驚いたことに、アイミはTwitterを始めたのは最近だが、僕のつぶやきは以前から追つてたそうだ。別サイトで僕のつぶやきが引用されたらしく、そこで興味をもつたのだと微妙に恥ずかしながら言つていた。

こつちこそ、なんだか「ずっとまえから、好きでした」と言われてると錯覚して、むず痒いような、嬉しいような、悪くない気持ちになれた。

アイミは平日の昼頃から夕方までしかTwitterに顔を出さないので、僕が時間を意識して合わせるよつてしていた。

アイミと過ごす時間は居心地が良い。

十年来の友人、なんでものはリアルの僕にはいないけど、まさしくそんな感じにすぐに打ち解けることができた。

他のフォロワーともやり取りがあるものの、明らかに僕はアイミを特別視している。それを恋愛感情と呼ぶには恥ずかしいし、そもそもアイミの性別諸々だってよくわかつてない。

けれど、今の関係を大切にしたいと思えるほど、僕がアイミに惹かれていたのも事実だ。

ふと、アイミが珍しく僕に@を付けないでつぶやき始めた。

UNOOEN 土曜日なんて、田曜日なんて、来なければいいのに。

UNOOEN 誕生日なんて、絶対に、来なければいい、てか、来ないでよ。

UNOOEN そうだ、朝も夜も来なければいい、そうしたら、あたしはアイミでいられる。

gm_kun @UNOOEN ん？ 急にビックリした？ 志半ばで死んだ詩人でも憑依したのか？

UNOOEN あたしはお人形じゃないし、もう、しっかりと、名前だって、あるんだ。

UNOOEN @gm_kun ぐずつちが名前くれたとき、あたしは救われたんだよ。

gm_kun @UNOOEN なあ、どうして名前だったんだ？ それじゃあ、まるで……。

UNOOEN @gm_kun ごめん、ヤツが帰ってきたから。じゃあね。

「はあ？」

思わず、声が漏れる。

なんなんだよ、あいつは！

勝手に中二病全開で二ヒリズムな詩をつぶやき始めて、名前をくれてやつたことで救われただって？ まるで、今まで自分の名前がなかったみたいな言い方じゃないか！ それに、ヤツって誰だよ！

男か？ てか、アイミは本当に女の子なのか？ 僕はいったい、何に苛ついてるんだ？

とりあえず落ち着け、僕。

ちょっとばかし、僕としては頭に血が上ってる。
すーはー。

深呼吸。

人混みを歩くと過呼吸になることが多い僕としては、かえつて意識的に呼吸することで自分を落ち着かせることができ。大きく三回深呼吸した頃には、僕はもうすっかり落ち着いていた。

アイミの情報を整理しよう。

1・どうやら僕と同じで、引きこもりらしい。不登校の学生という可能性もある。

2・土曜日と日曜日、それに朝と夜が嫌いらしい。平日の昼間は平和なのだろうか。

3・誕生日も来てほしくないらしい。妙齢の女性でお肌の曲がり角だつたりするのか。

4・名前にやたらと執着してる。お人形じゃないって、どうこう意味だろ？

結局、わからないことだらけということが整理できた。

それに何が一番わからないかといえば、僕がどうしてこうも頭に来てるかということだ。自分のことですら、そういう頭に来ない。馬鹿にされても、冷めた目で見られても、気持ち悪いと罵られても、僕はきっと怒らないし怒れない。石のように黙つて人の顔色を気にしながら怯えて胃を痛めはするけど、全て自分がどうしようもない人間だからと結論する。

けど、アイミは。

わからない。

そう、わからないから、苛ついてるんだ。裏を返せば、僕はアイ

ミに興味をもつてる。傷の舐め合ひだらうが同属憐憫だらうが、僕に「もう、わかつたから」と逃げ場所をくれたアイミのことを、もつと知りたい。

これは恋なのかもしけないと思つたけど、アイミが男といつ可能 性もあるし……深くは考えたくなかつた。女の子だとしても年齢や 顔だつて、正直重要なのである。自分のことは棚に上げてしまひけ ど、重要なのである。本當、どうしようもない。

ヤシが帰つてきたとこいつぶやきを最後に、アイミは顔を出さな くなつた。

僕はアイミを待ち続けた。

一日一日が、これほど長く感じたことはない。

つぶやくネタはなかつたけど、僕がTwitterをやんと見てることを忘れるために、毎日定期的につぶやき続けた。

「…」（WCだけに）
「ワールドカップの花言葉は?」「もう一步前へ

ダーツバーの壁に磔られて小さな穴だらけにされるだけの、簡単なお仕事です。

【BLの香りがする歴史上の事件】カノッサの屈辱

虚しい気持ちにもなつたけど、止めるわけにもいかなかつた。

ここでアイミを取り逃したら、僕は今度こそ逃げ場所を失つてしまつのではないかと、わけもわからぬ焦燥感に駆られた。

薄暗い部屋で一人、僕は気がおかしくなりそうになりながら、アイミを待つ。

買い溜めしたカツブラー・メンは底を尽き丸一日なにも固形物を胃に入れてない。喉の渴きは水道水で癒してると、味気ないのが憎たらしい。そろそろ健康で文化的な最低限度の生活をしたい。そのためには家を出なければならない。

家を出る、か……。

自虐にしかならないけど、引きこもりを甘く見ないでいただきたい。

怖いのだ。人が、外が、視線が、この世界が。

本当にどうしようもなくなつたら外出はしないといけないけど、今回はアイミが現れるのをいち早く察知したい思惑もあり、引きこ

もりに妙な拍車がかかつていて。あまり寝てもない。朝晩の感覚はとつの昔に失つてゐるけど、今や時間の感覚すらあやふやだ。時間が進んでるのか戻つてるのかだって、僕には見当もつかない。

毎日が、ただ、流れしていく。

Twitterのタイムラインのように、オートマティックに。僕が特別な行動を起こさなくとも、世界は変わらない。

だったら、僕一人が眠つてしまつても、消えてしまつても。

死のうかな。

そう思うだけで、本当はどうしようもなく生きたいことくらい、僕は気づいてる。

自分勝手と罵られようが、実際、自分勝手なので反論しようもない。甘んじて受け入れよう。僕は、本当に、どうしようもない。どうしようもない、ゴミ屑です。けど、もう少し、生き恥を晒すのを許してください。

どうして、ネットに、匿名の掲示板に、動画のVLOGに、あるいはTwitterに、僕が今まで依存してきたのか、ふいにわかつた気がした。

未練を、残したいんだ。

死なないために、生きるために。

少しでもこの世界に未練を残していき、明日の楽しみを絶やしたくないんだ。

たとえば、顔も知らない誰かの失敗を顔も知らない誰かと一緒に責め立てたり、まだあまり知名度がなくそれでいて完成度の高い動画を独占欲丸出しで視聴したり、僕みたいなどうしようもない人間の精一杯のお道化に反応をもらえることが快感になつてきたり。

全て、刹那的で、それでいて、循環的だった。

同じようなことが、日々、繰り返されていく。

その輪つかの中に組み込まれることで、僕は誰かと楽しみを分かち合うことができた。

ネットが優しいわけでも、現実が厳しいわけでもない。

僕は、ただ目を瞑りたかったのだ。思考停止。それにネットが役買つた、それだけだ。

物書きになりたい、その夢だつて、どうに出来ても恥ずかしくない思考停止手段だらう。

小説を書いてネットで公開すると、少なからず反応がもらえる。他人からの評価が悪かつたり、自分自身でも出来に納得できなかつたり、僕の場合はそういうた不完全燃焼感が次に繋がる。あるいは構想中の長編用プロットを練つていく度に、ふと思いついた面白そうなアイデアをメモする度に、いつか書きたい物語を貯め込んで抱え込んで、僕はどうにか未練を残してゐる。

「本当、どうしようもない……

思えば、酷い口癖だ。

どうしようか、どうしたいのか、考えるのを避けてるだけ。

どうしようもない人間だ、と自覚があつて変わらないわけだから、どうしようもない。

酔いから冷めたみたいに思考停止から冷めると、本当に吐き気がするほど自分がみじめに感じられ、もつと愚鈍になつて右も左もわからなくなりたい、違法合法脱法と枕詞が付くようなお薬に手を出したい誘惑に駆られるけど、臆病者で小心者な偽善者の貪らん人には幸い手が出せない。

パソコンのディスプレイがちらつき始める。

さすがに、目がしばしばしてきた。

かれこれ三十時間くらい起きてるか、活動可能時間はゆうに限界を越えてる。

船を漕ぎ始めそうになりながら、Twitterを更新する。この行為も、もう何度繰り返したかわからない。そこで、僕はデフォルトの鳥アイコンに気がついた。

実際に、一週間ぶりのアイコンのつぶやきだ。

時間帯はいつもと同じ毎過ぎ……ではなく、深夜だつた。

UNOEN 【急募】たすけて。

……え？

なんだよ、それ？ いきなり「たすけて」って、どうこうことだよ？ この間つぶやいてたヤツに関係するのか？ そもそも、僕は、アイミを助ける義理があるのか？

人が人を助けるなんておこがましい気がする、いや、けど……。あのときの「もう、わかつたから」というさり気ない、もしかしたら特に意味はないかもしだれいつぶやきで、僕はこの世に新しい未練を残せた。どういう経緯か僕はアイミと「うな前をあげることになつたけど、これでは足りないかもしない。

そうだ、助けよう。

アイミを鳥かごの中から、出してやるわ。

こう見えて、僕は案外義理堅いところがある。何かをしてもらつたら、それに報いたいし、恩には恩で返したい。人に傷つけられるのはもちろん嫌だし、だからこそ、人を傷つけてしまう可能性に尻込みしてしまう。

気を遣いすぎ、そう言われることがあつた。

自分を変える気概などなく、耳と目を閉じ口をつぐんで孤独に暮らすのも恐ろしく、僕はネットのぬるま湯に漂つっていた。傷つけるリスクを隠蔽して、恩に報いをという信念を曖昧にして、僕はこれまでだらだらと生き繋いできた。

だけど。

もう、ここから出よう。

ここから出で、アイミを救い出してやるわ。

僕はアイミに勢いのまま返信する。

g_m_kun @UNOEN 助ける！ 救い出す！ 手を差し伸べる！ だから、どうだよ！

お前はヒーローか、というツッコミを入れたくなるくらい熱いつぶやきになってしまった。柄じゃない。でも、いいんだ。僕だって、ヒーローになりたい。退屈な授業中に学校がテロリストの襲撃を受けて教室に立て籠もるという危機的状況を、僕が秘密裏に睡眠學習ないしは漫画などで身につけた殺人術で蹴散らして、あつという間に学校の救世主として一目も二目も置かれる存在になる。こんな妄想を繰り広げてばかりいたくらいだ。

アイミの返信は、一時間後。

通常のツイートではなく、僕宛のダイレクトメールといつ形でやつて来た。

UNOEN ありがと、ぐずつち……。明日の暁頃うちに来て、あたしをここから出して。

そこには他に、住所らしきものが書かれていた。

覚えのない地名だったが、調べてみると僕の家から一時間ほどで行けるようだ。思いの外近い、と言つべきなのかもしない。少なくとも、新幹線や飛行機が必要な距離ではない。

「行こう……アイミを助けに」

アイミがどんな人間なのか、僕は知らない。性別も年齢も職業も容姿も、すべてディスプレイの向こう側に、ネットの先にあるもので、僕はつかがうこともできない。香ばしいオジサンかもしない。ただの悪戯の可能性もある。あるいは謎の組織の陰謀か。指定の場所に行つたら黒服の兄ちゃんに囲まれて臓器を安値で買い叩かれて、挙げ句の果てに東京湾にコンクリと一緒に沈められてしまつかもしれない。

それでも、構わない。

いや、やっぱりそれは困るけど、僕は行こう。

僕にとってアイミがそうであったように、アイミにとって僕も逃げ場所になつてやる。う。

今日は英気を養つために、このまま寝ることにした。明日は早めに起きてお風呂に入つたり、外出用の服を「ヨリ箱」と自称する僕の部屋から探さないと。

gō-kun むやすみなさい。明日は幼児なんぞ、もつ寝ます。

完全に誤字だった。

おやすみというレス以上に変態変態とレスされながら、僕は湿った布団に潜り込んだ。

……むくじ。起きた。

明るい、朝か、いや昼なのか。

寝ぼけた頭で考えるに、確かアイミのダイレクトメールには明日の昼頃、つまり今日の昼頃うちに来てとこうことで、ああなんだ今もう僕のうちじやん、そりやそりや遅刻するはずないよ、待てようちというのは僕のではなくアイミのうちだよな、そして今は昼過ぎでお天道様があとは沈んでいくだけで、おい、どうすんだよ、寝坊かよ！

逡巡すること、三分間。

布団から飛び起きた時に、僕はシャワーを浴びた。

考えてみれば、ひと月以上は外出をしてなかつた。買い溜めしたカップラーメンや缶詰の類は底をぬき、もうそろそろ外出なれば餓死をするなどい瀕死際なタイミングでの、アイミの救出依頼だ。

「さあて、服……どこだよ、おい！ 出て来いつて、恥ずかしがらないでさー！」

こんなこと言つて、恥ずかしいのは僕の方だつたけど、氣にしては負けだ。

よれよれなスウェットじゃない服つてビニに転がつていたつけな、とエントロピーが増加して冗談じゃなくゴミ箱のように乱雑な部屋を、ハムスターの生まれ変わりのように掘つて探して、なんとかしわくちゃのワイヤーシャツとジーパンをサルベージした。

まあ、見られなくはない、だろ？。

冷房ガンガンでいつも気にしてないけど、季節は夏。

上着なんか無用だし、上着を探すのにはもつ半時間ほど時間を要することを考えると、これがベターな格好だった。体型はお世辞にもたくましいとは言えないけど、太ってない分いくらかマシだろ？。

それに合わせて、ややシワがある程度の白いワイシャツにジーパンスタイルだったら、よほど挙動不審じゃなければ、お巡りさんを呼ばれることがないくらいに爽やかな青年に見られるはずだ。

鏡で自分の顔を極力見ないように顎を引きながら上目遣いで髪型をチョックして、僕は一ヶ月ぶりに外の空気を吸つた……！

「…………寒ツ！」「

季節はどうやら秋らしい。

さようなら、僕の夏休み。

まあ、僕は年中無休で夏休みを仕事にしてるようなもんだけど。ぼろアパートの扉を背に、僕はネットとは違うリアルな人の荒波に向かつて歩き始めた。

怖い。

人の視線が、重みが、発する熱が、怖い。

勢い勇んで外に出たのに、僕は目的地まで電車に黙つて乗ることさえ満足にできなかつた。乗つた直後はいい。なのに、扉が閉まつて容易には出られない状況になつてしまつと、急に息苦しくなつて暑くないのに汗が噴き出て、うわつ、秋なのに汗だくなんて気持ち悪いな僕、という緊張感で他人の視線を意識するようになつて、お手上げだ。

三駅か四駅ごとに、途中下車して呼吸を整える。

帰りたい……。

どうして、こんな苦しい目に合つてるんだっけ……。

僕はポケットからiPhoneを取り出して、クライアントからTwitterを確認する。僕がこんなに苦しい思いをしていても、相変わらず思い思いのつぶやきでTwitterは満たされていた。研究室の飲み会が面倒くさい、どうして頭の悪い上司しかいないんだ職場に、カラオケなう、お昼ご飯はラザニアを作りました、日本の政治の悪いところは、エトセトラ。

なぜだろう、それを見て、とても安心できた。変わらずに一定の

距離を保って、僕が知ってる僕を知ってる存在が確かにいる、それが心強かつたのだ。

アイミのアカウントも確認したが、あれきりつぶやいてない。

たすけて、という言葉が、今にも聞こえてきそうだった。

待ってる、我慢しろ、僕が駆けつけてやる！ 僕の方から駆けつけてやる！

恥ずかしい妄想癖のある中学生みたいな熱意が、今の僕の胸には宿っていた。

僕に生きようとすると未練をくれたアイミを、助けたいんだ、手を差し伸べたいんだ。

あいにく、僕は勇者ではないけれど。町の周辺のザ「敵どじろか」、こいつやって外に出て電車に乗ることでダメージを受けるステータス異常『引きこもり』の二十歳児だけれど。僕だって、僕だって……。変わりたいんだ。もしこんなどうしようもないゴミ屑が、誰かのためにできることがあるとわかつたら、誰かを助けたりできるのならば、僕はどうしようもないから卒業して、どうにかしなきゃと思えるようになるかもしれないんだ。

ダイレクトメールに送られた住所を魔法の言葉のよう口の中でつぶやきながら、僕が目的の駅に着いたのは日が沈みかけた頃、だった。

ヤツ、というのにできるだけ鉢合せたくない。

僕は送られた住所をGoo-gleマップに入力して、歩き慣れぬ町を職質される一步手前な拳動不審さでうるついた。

下校途中の学生が僕を見て笑つてゐるような気がした。買い物帰りのおばさんが僕の噂をしてるような気がした。散歩中の犬ですら僕を馬鹿にしたような目で見てる気がした。

気がした、気がした、全部、僕の気のせいかもしれないのに、気が分が滅入る。

逃げたくなる、閉じ籠りたくなる、死にたくなる。
ぐつと、腰に力を入れてその衝動を堪えた。

逃げるのではなく、助けるためにここまで来たんだ。閉じ籠つてばかりじゃ駄目だと、外に出たんだ。死にたいんじゃない、本当はどうしようもなく生きたいんだ。

久しぶりの遠出で、叫んで膝を抱えてうずくまりたくなるほど疲弊しながら、僕はやつとそれらしきアパートを見つけた。

部屋番号は一一、錆び付いたブランコを漕ぐような音を立てる階段を上つたすぐ先に、正面の部屋はあった。

扉の前で、しばし逡巡する。

呼び鈴を鳴らすか否か。

あまり悩んでいたら、近所さんに拳動不審を目撃されてしまつ。無礼と危険を承知で、僕はドアノブに手をかけ、ゆっくりと扉を開けた。

鍵は、かかつてない。

中の様子を窺つてから入りたがつたけど、家の前でうつうつしてゐるのも良くないと判断。さつと、滑り込ませるように僕は中に入り込んだ。

他人のプライベートなテリトリーに入るのは、お情けで誘われた小学校のお誕生日会以来だつた。他人の家の、匂いがした。なぜだか、居心地が悪くなる。ここはお前の来るべき場所じゃない、帰れ帰れ、と輪唱されてる気分になつたけど、意識的に頭を横に振り、くだらない被害妄想を振り払う。

「」が、アイミのうちなのだろうか。

玄関の脇に台所があるタイプの小さいアパートだ。きちんと整理が行き届いていて清潔感があった。正面、和室と思わしき一部屋は、襖が閉まつていたので様子がわからない。靴を脱いで、恐る恐る中へ入つた。

襖に手をかける。

心臓が口から出てしまつんじゃないか、本気で心配になるくらい動悸が激しい。

この先に、アイミが？

それとも、もうヤツが帰つてしまつたか？

どのみちここまで来たら不法侵入だ、アイミだらうとヤツだらうと、僕が相手になつてやる、二ートなめんな二ート、どうせ失うものなんてないしな、と開き直つて僕は自分を奮い立たせた。なるべく音を立てないように、襖を横にすらす。

部屋には……誰もいなかつた。

物が少なく生活感を感じさせない和室の真ん中、ちゃぶ台に置かれたノートパソコンが開かれっぱなしになつてるのが印象的だつた。誰も、いない？

もしかして、アイミは僕の想像上の存在だつたりしたのか？

あるいは、あの忌まわしき『bot美人局事件（勝手に命名）』の再来か？

そう思つてた矢先。

「…………れ？…………誰？」

と、か細い声が聞こえてきた。

幻聴じやなければ、押し入れの中から声がする。

ん？ 押し入れの中だつて？ どうして？ どうして？ ちなのに隠れなければならんの？

不審に思いながらも、意を決して、僕は押し入れを開けた。そこには。

「…………だ、れ？ もしか、して…………」

押し入れにうずくまるようにして、女の子が身体を震わせて丸まつていた。

黒目がちの大きな瞳を潤ませながら、肉食動物に捕食されるのを悟り運命を受け入れた草食動物のような弱々しさで、女の子が体育座りしながら僕を上目遣いで見上げた。

思わず、僕は目を疑つた。

女の子があまりにも可愛いから目を疑つたのなら、良かつた。いや、それも正しい。もし、その異様な光景が広がつてなかつたら、目の前の女の子は我が目を疑うほどの美少女と形容するだけの容姿

だつた。

中学生ぐらいの年頃だろう。黒髪のボブカットは艶やかで、顔立ちや体格などはまだ女性として熟していないながらも、それがかえつて中性的で美しいと素直に感じた。

だが、田を疑つたのは、女の子の整つた容姿じゃない。

まずは、服装。

女の子が身につけていたのは、アパートの和室には不釣り合いなほどフリルのたくさんついた黒いドレスだった。好きで着てるというより、着せられてるという印象を受けたのは、どうしてだろう。まるで、お人形やペットの犬に服を着させて喜んでるような悪趣味な感じを受けた。

田を疑いたくなる、あるいは覆いたくなる要素は、まだあつた。ドレスから露出した肌には、鞭で打つたような腫れがあつたのだ。ほとんど陽を浴びてないような白い肌に、呪われたミニズが纏わり付いたような赤い腫れが幾筋も走つていた。

虐待。

ふいに頭に浮かんだ言葉が、妙にしつくりと、気持ち悪いくらいしつくりと来たことに怖気がした。目の前の女の子は、一体今までどんな扱いを受けてきたのだろう。そんなの、想像できない、したくな。

「君が……アイミ、なの？」

びくり、と身体を大きく震わせてから、とても申し訳なさそうに、とても切なそうに、女の子は頷いた。

僕は今すぐにでも彼女を連れてここから逃げ出したくなつた。生まれて初めて、僕は大声を上げなくなつた。泣きそうで、だけれど怯えて泣けないでいる彼女に代わつて、僕が泣いて助けを求めたかつた。こんなところにいてはいけない、きっと、大事な何かが大きくな狂つてる。

だけど、彼女一人を連れ出すことすら叶いそうにない。

女の子の、アイミの首には、鎖に繋がれた首輪がはめられていた

から。

首輪、かよ、人間なのに、こんなのって……。

僕はしばらく、呆と立ち尽くしてしまった。

だから、アイミが目を見開いて僕の後ろに視線を向けてることに気づくのが遅れてしまった。

後頭部に鈍い衝撃を受けたと同時に、僕の視界はブラックアウトした。

「…………な！…………い、…………きろー！ ほら、起きろって！」

誰かが、僕の頬を叩いて起こしてくれてる。

隣に住んでるちんちくりんな幼なじみなんていないから、借金の取り立て人か誰かだろうか。でも僕は別に借金もしてないよなあ、不思議だなあ、頭が、主に後頭部が痛いなあ、不思議だなあ、そして目の前には見知らぬ男が立ってるなあ、てか誰？

身体を動かそうとして、違和感。

声を上げようとして、また違和感。

僕は、ようやく自分の置かれてる状況がわかつてきた。

「ようやく、目が覚めたみたいだね、そのまま死んでくれても良かつたけど、どうせ死ぬにしても余興くらいにはなつてももらわないとね、俺だって楽しみたいんだよ、今日は特別な日だからさ、ああ、興奮してくるよな、どうだい、君も祝ってくれるだろ？」

僕の頬を叩いていた神経質そうな眼鏡の男が、穏やかな表情を浮かべながら意味不明なことを口走っていたけど、今はそれどころではない。

僕は手足をしつかりと布のよつなもので縛られ、口にもハンカチが何かを押し込められガムテープで留められた状態で、裸を背にして座つていた。

身動きがとれず声も上げられず、アイミのうちで無様にも捕まってしまつたんだ。アイミを助けるつもりで来たのに、ヤツによつて、僕も囚われてしまった。そうだ、アイミは？

アイミは、和室には不釣り合いな黒いドレスを着たまま、部屋の隅っこで精気のない瞳でこちらを見ていた。何もかも諦めきつてしまつて、疲れてしまつて、僕ですら思わず痛々しくなつてしまつほど、絶望し憔悴しきつた顔をしていた。

Twitterでのとぼけた、だけれど明るい印象など見る影も

ない。

ふつふつと、怒りが湧いてきた。

「今日ははさ、ポチの十五歳の誕生日なんだよ」

「ポ、チ……？」

嫌な、予感がした。

「ああ、君は知らないかもしれないけど、アレは俺の実の娘でさ、名前はまだないんだよ、アレの母親と離婚調停してるときに生まれた子で親権だなんだガタガタしてたからさ、あの馬鹿女ぶん殴つて黙らして俺が引き取ることになったんだけどね、そうそう、出生届？っていうの、出し忘れちゃって、名前はまだない、猫みたいだね、呼びやすいからポチって呼んでるから、名前は犬みたいだけどさ、ハハハハハツ！」

ああ、今の僕の気持ちを形容する言葉がほしい。

地球上のありとあらゆる口汚い言葉を集めてブレンドしても、きっとここには言い足りない。言葉のもつ潜在的な暴力性をここまで感じたのは、初めてだった。学生時代に虐められてた経験なんて、振り返れば大したことなかつた。狂つてるとか狂つてないとか、そんな表現が生易しく思えるほど、身体を曲げて大笑いしてた目の前の男はズレていた。

怒りも度が過ぎると、冷えてくることを知った。

冷えて、冷え切つて、今なら冗談抜きでこの男を無表情で殺せてしまふかもしれない、と……。

駄目だ、落ち着こう。

まずは、この状況を打破する手立てを考えなければいけない。力もないし、頭も良くないし、働いてもなければ夢もあやふやな僕が、いつたい何ができるのか、わからない。だが、一刻も早くアイミをここから連れ出したかった。連れ出さなければならぬ、と強く感じた。

「君はあれだろ、ネットの世界からやつてきた正義の味方といったところだろ、最近流行りの、なんだっけな、ついたーだけ、や

つてることは知つてたけど、助けなんか呼んだらどうなるか、ポチも学習したかと思ったら考えが甘かつたか、もつと厳しく『嬢』をしないといけないみたいだな

嬢。

その言葉を聞いて、アイミはひときわ、身体を震わせ始めた。

「……わー。……めんなさい。……『めんなさい』『めんなさい』

「まあいい『嬢』は明日以降にして、今日はポチの誕生日を祝つてあげなきやいけないんだつたな、約束通り、というか俺が勝手に決めてたことだつたんだけど、ポチも晴れて十五歳になつたからさ、ポチを『女』にするのも俺の仕事だと思うんだよね、今までみたいに『嬢』じゃない、しつかりと俺がポチを『女』に、立派な『女』にしてやるの』といつ親心を、君みたいな若い子にはわからないだろうなあ

「『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』

「大丈夫だよポチ、ほーら、こんなに俺は優しいから」

「『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』

眼鏡の男は壊れた人形のように謝り続けるアイミの頭を、氣味が悪くなるほど優しい手つきで撫でていた。男の足下で虚ろな目をして「『めんなさい』」とつぶやき続けるアイミ。それをなすすべなく見てるだけの僕。

サークスの象の『』とく、アイミはさきつと反抗しないよう『』『嬢』

られたのだろう。繰り返される「『めんなさい』」を聞きながら、僕は傍観者でしかなかつた。

このままアイミが『女』にされるのを、黙つて見てなきやいけないのか？『冗談じやない！ そんな馬鹿なこと許されるか！ 実の父親が娘を犬扱いして首輪して『嬢』と称して虐待して挙げ句の果てに『女』にするだと！

めらめらと、怒りが湧いてきた。

怒りに沸点があつたら、既に部屋を怒りの蒸氣でいっぱいにできただろう。僕は眼鏡の男、アイミの父親をありつたけの憎悪を込めてにらめつけた。何もできない自分が腹立たしく、縛られた手足をばたつかせた。口に含められたハンカチを吐き出す勢いで、腹の中から声を振り絞った。

「うー————ツ！」

「どうしたんだけ急に、君が思つてる以上に君は無力なんだ、黙つて見てな、よッと！」

サッカーボールのように、眼鏡の男が僕の腹を思いきり蹴り上げた。

胃液が溢れ口の中がいっぱいになつたが、吐こうにも吐けない。酸っぱさと一緒に圧倒的に氣づかされた、僕は世界の主人公じゃないということに。

妄想のなかだつたら、僕はテロリストを片手であしらう謎の転校生だつたり、失われた禁呪を使いこなす大魔法使いだつたり、常人を圧倒するセンスを秘めた流浪の剣士だつたり、もうなんでもいざれなのに。

現実の僕はどうだ。こんな状況になつても、アニメや漫画の主人公のように急に強くなつたりしない。無力で無職で取り柄も職歴もない、ただの引きこもりのニートだ。きっと、このままだと最悪の結末をこの目で見届けることになる。

視界が歪む。

悔しさと情けなさで涙が溢ってきた。

ああ、どうしようもないほど、本当に、僕は無力だ。

眼鏡の男は、腕を組んだまま僕を見下ろして、急に満足げな表情を浮かべた。

「ああ、これはいいね、もしかして君はついたーとやらでポチに惹かれたのか、そつか愛だね愛、それは本当にいいよ、だったら尚更、君には是非ともポチが『女』になる一部始終をしつかりと見届けてもらいたい、俺さ芥川龍之介の『藪の中』好きなんだよ、知つ

てる『藪の中』？

知つてたけど頷くのも癪だったので、僕は陸に打ち上げられた魚のようになに暴れ続けた。『藪の中』の真相はタイトル通り藪の中な感じで曖昧になつてたけど、縛られて見てるだけだった男が死ぬといつことは搖るぎなかつた。

僕は、殺されるのだろうか？

それとも、無念のあまり自殺してしまうのだろうか？

ちよつとまえまでは「死のうかな」が口癖ならぬ考え癖だったのに、今はどうしても死にきれない。視界の隅で心配そうな目で僕を見つめるアイミ。彼女を助けるために、僕はここまで来たんだ。男なら、誰にだつてヒーローになりたい願望がある。僕だつて、どうしようもない僕だつて、目の前で理不尽な目にあつてる女の子がいたら助けたいんだ、手を差し伸べて連れ出してあげたいんだ、どうにかしなきやと腹の底から本氣で思つんだ。

勝算なんてまつたくない。

ただ、僕はアイミを助けたい一心で芋虫のよつに這いつくばりながら眼鏡の男に向かつていつた。足を縛られ、両手も後ろに固められてる状態なので、無様でもみつともなくとも畳を這つていくしかない。

「ハハハハッ！ なんだいそれは、もしかしてそうやつて悪あがきしたらボチを助けられるとも思つてゐのかい、本当に君は楽しい、ねツ！」

容赦なく、蹴られる。

暴力、暴力、また暴力。

肩が外れたかもしれない、痛い、口の中は血まみれだ、痛い、目蓋が切れて視界も塞がる、痛い、ああ痛いなあこのやううー、どうして僕はアニメや漫画の主人公のようにいかないんだ！

「や、やめ……」

「ん、なんか言つたかなポチ、まあ氣のせいだと思つけど、俺のやることに口答えなんかしたら『嬢』の時間が倍になるよ、ああそつか、早く『女』になりたいからこんな『ハリ』肩と遊ぶのやめてほしいつてことか、まったく十五歳になつたら急にこれだもんな、俺も久しぶりに頑張る必要があるかな、ハハハハツ！」

「い……い、や……」

アイミは懸命に抵抗しようとしてるけど、声にならない様子だった。

いつたいヤツに『どんな『嬢』をされたら、あんなにまで鬻える』とがでくるんだ。もしこれでアイミがヤツに『女』にされてしどうことを許したら、完膚無きまでに取り返しがつかなくなってしまうんじゃないか。

今の僕の痛みなんか、アイミが受けってきた痛みの十分の一にも満たないだろう。

実の父親にポチと呼ばれて、恐らく学校すら行かせてもらえず、唯一許された平日の毎間にネットの世界に逃避し、偶然Twitterで僕を見つけて、『嬢』が厳しくなるリスクを冒しながらも僕に助けを求めるアイミ。

運命なんて、くだらない言葉かもしね。

けれど、偶然と切り捨てるには惜しい。

僕はアイミに「もう、わかつたから」といつ言葉をもらい、お返しに「アイミ」とこの名前をあげた。僕にとつてその言葉が逃げ場所だつたように、アイミにとつても名前は逃げ場所だつたんだ。

僕たちは出会いでくじて出合つた、そんな陳腐な言葉さえ浮かんでぐる。

引き戻もつていた僕と、理不尽な境遇から外に出たかったアイミ、

僕たち一人が一緒になれば、ちょうどいいじゃないか。ああそりゃ、二人一緒に変わつてやろう。

飛べないなら、歩いてやる。

急に強くなれないなら、少しずつ強くなつてやる。

一人じゃ外に出ることもできないなら、一人で寄りかかつて外に出てやる。

「うーん、もう抵抗しないのかな、まあいいか、やつぱり君はその程度の屑なんだ、氣絶されちゃ観客にはならないし、ほら、ちゃんと座つて、ポチが『女』になるとこを見届けてくれよ、ポチだつてその方がきつと喜ぶからさ、なあポチ」

「……や」

僕を裸に立てかけるように座らせると、男は背を向けてアイミに近づいていった。

今しかない。

激しくもがいたせいか、そもそも縛りが甘かつたせいか。足を縛っていた布がゆるんで、ある程度の自由がきくようになつていた。

僕は両足で踏ん張るように立ち上がり、決死の思いで油断しきつた男の背中に飛び込むように体当たりした。

不意を突くことができたのだろう。

男はうつ伏せに倒れて、動かなくなつた。

よし。

手応えは、ある。

あつたが、次に打つ手がない。

僕は未だに両手の自由を奪われてる状況だし、力だつて自慢できるものではない。

男の方も腕自慢には見えなかつたけど、今の状況で真正面からぶつかつてどうにかなるとは思えなかつた。

アイミも口を開け、驚いたように倒れた男を見てる。

充分痛い目にあつたんだ、僕はともかく、きつとアイミは……な

らさ神様、このままハッピーエンドでいいだろ？ ちょっとくらい慈悲を見せてくれてもいいだろ？

どうか、立ち上がるな！

どうか、立ち上がるな！

時間が止まつたかのような静寂が続いた。

一秒、一秒が、ヘドロの海を沈むかのように重く流れる。

まだ、男は動かない。

アイミも恐る恐る立ち上がり、一步、二歩と、僕に近づいてくる。無様だけど、不意打ちというみつともない戦い方だけど、これで終わつたんだ。

そう思い、僕は腫れて視界が悪くなつた目で改めて男を見た。

「……………痛い、なあ」

くそつたれな神様は、バッドエンドがお好みのようだ。

男は、むくり、ヒゾンビのよう立ち上がり、僕を睨みつけながら前進していく。

「ああ、まったく、俺は男を『躰』する趣味なんてもつてないからさ、もうさ、君、いらないよ、ポチが『女』になるところを見てもらおうと思ったけど、やめだやめ、残念だけど、君は選択肢を間違えたんだ」

男は屈み込んで、僕の顎に指をかけ強引に上向かせた。

「君みたいなゴミ屑は、人の役になんか立てないし、誰も救えないんだよ、ポチは俺の物だし、ポチは俺にとつて必要なペットなんだ、ポチの母親のように金銭感覚がズレてるギャンブル狂の馬鹿女とも違うし、無能なくせに態度だけはでかい会社の禿げた馬鹿野郎とも違う、ポチはね、俺の、娘なんだよ、どんなときも従順に、『躰』をすれば足でも黙つて舐めてくれる、俺のことを絶対に裏切らない、ポチはね、ポチはね……ツ！」

男は、泣いていた。

泣きながら、僕を殴り続けた。

まるで、子どもが駄々をこねるかのように

大切なオモチャを取られまいと、声を荒げて抵抗してゐるよつだつた。

「一撃」とに力は弱まつてくけど、抵抗できない僕はただただ拳を喰らうしかない。

誰だつて、言い分がある。

誰だつて、孤独なかもしない。

だからといつて、アイミから自由を奪ひ田の前の男を僕は許せない。

知り合つたきつかけはTwitterだつたし、ろくにアイミの過去を知つてゐるわけでも、面と向かつて会話をしたわけでもないのに、人の家庭に首を突つ込むのはおこがましいとか、そんな面倒くさいことはくそつたれな神様ごと斬つて捨ててやる。

僕は、アイミを助けたい。

僕なんかを頼りにしてくれたアイミを、どうにかして救つてやりたい。

だから、アイミも、助かりたいと本氣で思つていてくれ。

殴られたときに引っかかったのだろう、僕の口を塞いでいたテープは剥がれかけていた。

僕はここぞとばかりに腹に力を入れ、吐き出す。

口の中に入れられていたハンカチを男の顔に吐き飛ばすと、僕は腹の底から声を出した。

「アイミ！ こいつが何て言つても、アイミはアイミだ！ 名付け親で童貞ニードのキモオタ野郎が、アイミをここから救いだしてやるから、アイミも、もう、ポチなんてやめてここから出よう！」

口の中が切れていて、鉄の味がいっぱい、ろくに伝わらなかつたかもしぬない。

僕がアイミを救おうと思つても、ただの独りよがりなんだ。

Twitterで「たすけて」とつぶやいたように、現実でもアイミが助けを求めないと。

アイミは名前を呼ばれる度に、電撃が走つたかのように身体を震

わせていた。

「はあ、君、アイミって、誰だよ」

「アイミッ！」

「もしかして、ポチのこと言つてるのか、ポチはな、ポチなんだよ、アイミなんていう勝手な名前付けるんじゃねえよ、ああ、わかつてんのか、この屑が、ポチもそんな気障つたらしい名前なんか嫌だよな、なあ、ポチ」

僕を殴る手を止め、男が緩慢な動作で振り返る。

「あ……あた、しは……」

そこには。

お人形のように黒いドレスを着せられ。

露出した肌に呪われたミニズのような腫れが浮かび。
実の父親にポチと呼ばれて虐待を受けていた女の子が。
その両手にノートパソコンを高らかに掲げて立つていた。

「あたしは……」

「え、ポチどうし、て」

「あたしはッ！　アイミだあああああッ！」

アイミは、叫んだ。

あのおどおどしたポチの面影は、もつそこにはなかつた。
よほどアイミが自分に歯向かわないと思つてたのだろう。
男は呆気にとられた様子で、振り下ろされるノートパソコンの一
撃を直に受けた。

今度こそ、男が立ち上がることはなかつた。

「はあ、はあ、なんだか逃亡者みたい、だね」「……う、ん」

肩で息をしながら、僕たちはなるべく人通りの少なそうな路地に入つて立ち止まつた。

僕の格好も、アイミの格好も、目立ちすぎない。

ボロボロで血だらけな男が、生々しい傷跡のある可愛い「ゴスロリ」女の子の手を引っ張つて町中を歩いてるのだ。間違いなく、誰かに見つかつたら僕は変質者として手が後ろに回つてしまつだろつ。

幸い、アイミのうちからここまで、買い物帰りのおばあさんくらいしかすれ違わなかつた。心配そうにこちらを見ていたおばあさんには、「いやあ、飼つてる猫にやられたんですよ、ははは」と笑顔で言つておいたから、問題ない。はずだ。

ヤツは、アイミの父親は、まだ倒れたままだろうか。

頭を強打され男は気を失つてはいたものの、命に別状はなさそうだつた。

何かあつても後味が悪いので一応119番に電話をしたけど、そこからが問題だ。

まず、僕はボロボロだつた。

むしろ救急車が必要なのはヤツよりも僕かもしれない、という状態だつたけど、いろいろと聞かれるのが面倒だつたし、うまく説明することもできそつになかつた。

Twitterで知り合つた女の子に助けを求められて、引きこもりの身体をどうにかこうにか引つ張つていつたら、実はその子は変態な父親に軟禁され虐待されてまして、こりやいかんと思つて手足を縛られながらも体当たりをかまして、まあ、結局は彼女自身の手で決着をつけたんですけどね。

なんてことを、僕みたいな引きこもりがすらすらと警察の方に説

明できるはずがない。

アイミは未成年なので事情を説明すればしかるべきことに保護されるかもしないけど、未成年だからこそ保護者の元に戻されかもしない。

一応そういう選択肢もあると話したけど、アイミは黙つて僕の服を掴んで離さなかつた。

正直、きゅんときた。

守らなければならぬ、そんな大層なことを強烈に感じた。ポチではなく、アイミであることを選んだ彼女を、僕は守つていいきたい。

男のポケットから首輪の鍵を奪つて、僕はアイミの手を引っ張つてあの鳥かごから出た。

アイミは人見知りをするのか、そもそもヤツ以外とほとんど関わつて生きてなかつたからなのか、借りてきた猫ビビりではないほど大人しかつた。

何か強引にでもこの場を和ますことを言わないと、という見当外れな使命感に駆られ、僕は安易にも下ネタに走るという暴挙に出た。「とりあえずさ、うちに帰つたら、一緒にお風呂に入ろう、うん、それがいい。僕もボロボロだし、アイミだって汗かいたら。そうか、どうせなら、洗いつこしようか、洗いつこ」

僕はわざとらしく手をわきわきといやらしく動かしながら言つた。もちろん、「冗談だ。冗談、だけど……改めて見るとアイミは確かに可愛らしい。それに、今日でちょうど十五歳、めっちゃストライクゾーン。い、いやいや、それじゃあ口リコンじやないか。

引きこもりの二ートから、ロココンの二ートにクラスチョンジした！

全然駄目じやん、なんか似たような展開見たことあるしー。

あ、そういうえば、今さり気なくうちに帰つたらなんて言つたけど、これからアイミがどこに住むか問題だ。

正直、他にも問題なんて山積みだ。

出生届を提出してないというアイミの今後はどうするんだ、僕だってただの二ートだしどうにかお金を稼がなければ、親権は確かに五歳から選択できたはずだからアイミの母親を見つけられたら何か進展があるかもしれない、そして何よりヤツに刻まれた虐待という重みがアイミにのしかかってくるだろう。

どうしようもない、なんて、もう言わない。

どうにかしなきや、いけないんだ、僕はもう。

「帰る……つて？」

消え入りそうな声で、アイミはつぶやいた。

僕は深呼吸してから、背中を向けたままのアイミに語り出す。

「一人で寄り添つて生活するくらい、なんとかするよ。今は二ートだけど、働き口も見つける。アイミの今後も、ちゃんと考える。両親が役所勤めだから、もしかしたらいい知恵をくれるかもしない。一人じやどうしようもなかつたけど、アイミとなら、どうにかしなきやと思えるんだ。だから……帰つたら一緒にお風呂に入ろう。」
そうさ、問題があつても、僕はアイミのためなら頑張れる。人のために自分が何かできるなんて今まで考えられなかつたけど、これからは……。あと、ギャグの基本は天井だと偉い人も言つてた。

「ぐずつち……」

少し前を歩いていたアイミが、くるりと僕の方に振り返つた。てつくり呆れたり怒つたりしてゐるかと思つたけど、そこには初めて見るアイミの笑顔があつた。口角をにやりと上げて、ちょっと生意気そうな、僕がTwitterでのやり取りで想像していたような、ドキリとする少女らしい微笑みだ。唯一想像とは違つたのは、その目に、涙がこぼれんばかりたまつてたこと。

「このとき、僕は恋をした。

僕は、アイミと初めてしつかりと向き合つて、改めて生きるために未練を植え付けられた。死のうかな、なんて、嘘でも言えない。僕はアイミと一緒に、生きたいんだ。アイミと一緒に、お風呂に入りたいんだ。いや……うん、それも本心か。

アイミは泣き笑いの表情で、僕たちの第一の出逢いを華麗に演出した。

「ぐずつち……猫のうんこ踏んで死ね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9180s/>

【急募】あたしの名前！

2011年5月2日02時25分発行